THE CENTER FOR SHIN BUDDHIST STUDIES

# 親鸞仏教センター通信

2021年3月1日発行
発行者　本多 弘之
編集・発行　親鸞仏教センター（真宗大谷派）
〒113-0034　東京都文京区湯島 2-19-11
TEL. 03-3814-4900　FAX. 03-3814-4901
e-mail　shinran-bc@higashihonganji.or.jp
ホームページ　http://shinran-bc.higashihonganji.or.jp
Facebook　http://facebook.com/shinran.bc
Twitter　https://twitter.com/shinran_bc

2021.3
第76号

## なりたくもない

親鸞仏教センター研究員　東　真行

「君は『カラマーゾフの兄弟』の中にでてくるアリョーシャのような男が好きなんだろう。わしはドミートリイだよ」――こう語ったのは暁烏敏（あけがらすはや）である。暁烏を善知識と仰ぐ西元宗助は、自著『凡人の求道』に「このお言葉は今にして深く身にしみる」と記す。旧満洲にわたり、「シベリア抑留」を経て帰国した今、ようやくその言葉を受けとめることができるのだ、と。

アリョーシャやドミートリイというのは、ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』の登場人物である。カラマーゾフ家の三男アリョーシャは「神と不死」を信仰するキリスト者であり、多くの人々に愛される天性の好青年でもある。

対照的に長男ドミートリイは放逸に耽り、「卑しさを愛する男」を自認する。彼は理想に身を焦がす気高さを有しながらも、父フョードルと財産や女性をめぐって争い続け、父と同様に淫蕩に身をやつしてしまう。好色漢のフョードルに向かって「こんな男がなぜ生きているんだ！」と絶叫するドミートリイ自身が、しかし父に似通ってもいるのだ。私はなぜ、自身が憎悪する者になってしまうのか。これがドミートリイの直面する難問である。

それにしても、「わしはドミートリイだよ」とは何と恐ろしいささやきだろう。暁烏の代表的著作『更生の前後』には「釈尊成道の一念は、己れこれ悪魔也との自覚である」という言葉がある。魔を外なるものとして打ち倒すのではなく、自身を魔と知ること。つまり私というものは、なりたくもない何者かになってしまうのではない。そもそも根底から、なりたくもない魔なのである。

ところで、なりたくもない者としてあるということは、たとえば老病死の現実からも認められるかもしれない。私たちが老い病み死ぬことを望まずとも、これらの苦は私たちにすでに組み込まれており、刻々と実現していくのみだ。この展転する苦を超える「不死」を仏教は説く。

仏教の教主、釈尊を求道者に変えたのは、路傍の出家者との出会いであった。忌むべき老病死のさなかで、自身も苦を超える者になろうという驚くべき心が釈尊に生じたのである。無量寿経に説かれる法蔵菩薩の物語は、この釈尊の願いを根源的に継承しているのだろう。

世自在王仏と出会い、法蔵はみずからも仏にならんとして本願を建立する。しかも、あらゆる衆生を仏という何者かに変えないことには、みずからは仏にならないと誓うのである。

なりたくもない者になり果てるほかない衆生にとっては、まったく願ってもないおせっかいである。

## ◇◇第２回◇◇
## 「現代と親鸞」公開シンポジウム

# 生まれることを肯定／否定できるのか？
## ―反出生主義をめぐる問い―

**開催趣旨**

親鸞仏教センター嘱託　中村　玲太

2020年10月24日（土）に第２回「現代と親鸞」公開シンポジウムを開催した。さまざまな専門分野の方をお呼びし、個々の立場からその苦闘や将来への課題等を問題提起として語っていただく「現代と親鸞の研究会」を開催してきたが、それをより交流・対話の場が開かれることを目的として開設されたのが本シンポジウムである。

本年度は、新型コロナウイルス感染症拡大に鑑み、オンラインリモート会議システムを使用してのシンポジウム開催であった。総計150名近くの方にご参加いただき、オンライン上で哲学、宗教学、親鸞教学からの問題提起、それに応答する白熱した議論となった。

テーマは、「生まれることを肯定／否定できるのか？――反出生主義をめぐる問い」。「生まれてこなければよかった」、仏教学の立場として、こうした問いを「ただの愚痴であって、意味がない」（佐々木閑「釈迦の死生観」、『現代思想』2019年11月号、161頁）とする見解もあるが、たとえ愚痴であっても――愚痴だからこそ、一つの凡夫の在り方が如実に現れていると見ることもできる。愚痴を抱えずにおれないのが我々凡夫ではないか、そう淡々と生老病死の苦しみに向き合えない存在ではないのだろうか。こうした問いを含め、本テーマを掘り起こすことで見えてくるものがある。我々人間の在り方、そして認識の限界、生命をめぐる宗教的言説の魅力と危険など。これらを多角的に検討した問題提起の一端を報告する。

## ◆ 問題提起とコメント

### Ⅰ　生まれることの悪と、生み出すことの悪

**青山　拓央**（京都大学大学院人間・環境学研究科准教授）

新たな人間が生まれてくることを肯定したい人にとっても、そうでない人にとっても、狭義の反出生主義には見るべき価値がある。ここで言う「狭義の反出生主義」とは、生まれてくる人間当人にとっての苦しみに配慮し、新たな人間を生み出す（意図的に作り出す）ことを避けるべきだという倫理的主張である。その主張は、論脈によって大きく二つに分けられるが、そのなかには、新たな生の（ほとんど）すべてを否定する立場だけでなく、新たな生の多くを肯定しながら生み出すことのすべてを批判する立場も含まれている。

以上をふまえたうえで私は、新たな人間を生み出すことは倫理的に無垢だと言いがたいものの、そのことは、出生をめぐる実践の在り方を一意的に規定しないことを示したい。他者に危害を与えかねない状況を意図的に作り出すことと、そのような他者そのものを意図的に作り出すことを区別したとき、後者は「避けるべき罪」、「背負うべき罪」、あるいは「奇跡」としての側面をもつのであり、そして私たちは実践のなかで、そのいずれかを引き受けていく。新たな生への肯定や否定は、この実践を後追いすることで具体的な内実を得ていくのであり、一般化された肯定や否定が実践につねに先立つわけではない。

### Ⅱ　生のトータルな肯定は可能か ―ショーペンハウアーとニーチェから―

**竹内　綱史**（龍谷大学経営学部准教授）

本発表では、「ショーペンハウアーは反出生主義者なのか」という問題と、「ニーチェはショーペンハウアーを批判して生のトータルな肯定を達成できているのか」という問題を扱った。

ショーペンハウアーは基本的に弱い（＝価値論的）反出生主義者ではあるものの、強い（＝道徳的）反出生主義者ではない。ただし、彼の倫理学の基礎である共苦〔同情（Mitleid）〕が世界全体の苦しみを認識できるところから、強い反出生主義を基礎づけることも可能かもしれず、また、人間の最高の境地とされる「意志の否定」が世界全体の目的とも語られることから、その目的達成のために人間を生み出すことを奨励する立場を彼がとっていると解釈することもできる。

一方ニーチェは、「この世は苦しみに満ちている」というペシミズムをショーペンハウアーと共有しているものの、だからこそこの世は生きるに値するという結論を出そうとする。そのためにニーチェは共苦道徳を激しく批判したうえで、苦しみに内在的価値を見出す道と苦しみに意味を見出す道を探るが、どちらもまだ足りず、時々ほのめかされる「各々の存在が各々において常に既に自己肯定している」という一種の存在論的ヴィジョンによってこそ、生のトータルな肯定に一番近づいているように思われる。

## Ⅲ 「生命讃仰」言説の落とし穴 ―親鸞思想を通して―

**難波　教行**（真宗大谷派教学研究所研究員）

生命を讃仰する言説は、世の中に溢（あふ）れ、ときにそれは宗教的言説という形をとって現れる。たとえば重度の身体障害があるといった、苦難に満ちたと映る生であればあるほど、そのような言説は宗教性を帯びているかのごとく発せられ、生命への肯定を迫ってくる。しかし、生まれたことを無条件に肯定（讃仰）する言説は、生まれたことを否定する実感を、むしろ強めることがあるのではないだろうか。

上述の問題意識をもつとき、想起されるのは、幼い頃の病によって手足の切断を余儀なくされ、親鸞思想に親しんだ女性――中村久子氏（1897 - 1968）の言葉である。氏の言葉を取りあげることで、「生命讃仰」言説の陥りがちな落とし穴を探ってゆく。そしてそうした言説が、かえって生命を否定せざるを得ない情況を生み出している事実に、無自覚かつ無責任であることを確認する。この問題点は、ロングフル・ライフ訴訟、ならびに相模原障害者施設殺傷事件に通ずるものである。

親鸞思想に照らせば、人間が生命を肯定したり否定したりする際の、ぬぐいきれない身勝手な価値判断と、その問題点を明らかにする仏のまなざしが見えてくる。親鸞思想を通すことで、仏によって生命やその在り方が「否定／肯定」されるということはあっても、人間が「肯定／否定」するということには危うさがあることが明らかとなるにちがいない。

## コメント

コメンテーター　**加藤　秀一**（明治学院大学社会学部教授）

「生まれることを肯定／否定できるのか」という問いは、共通の問いに対する答えが論者によって分かれるという種類の問いではない。それは、そもそもそれが何を意味する問いなのかということ自体をめぐって議論が錯綜し続けるような、それほど根源的な問いであろう。今回のシンポジウムを通して、私はそのような思いを新たにした。

青山氏は、人を生むこと、すなわち他者を意図的につくりだすことに「罪」が含まれる可能性を認めつつも、それは通常の法の下での他者危害とは別の次元にあるとする。私は後半には賛成だが、「生むこと」がいかなる意味でも「罪」ではない可能性をもう少し探ってみたいと思う。竹内氏の報告からはショーペンハウアー哲学の意外な「肯定性」を学ぶことができたが、なぜそれほどまでに「苦」に拘泥するのかという素朴な疑問は残った。これは仏教思想にも繰り返し向けられるべき問いだろう。難波氏による、「生命讃仰」言説の両義性をめぐる迷い（と私には思われるもの）の吐露を受け止めながら、私はユダヤ教・キリスト教における「苦難」をめぐる思想史と突き合せることで自分なりに掘り下げていきたいと思った。

このように、私は今回のシンポジウムでの議論から自分の問いを見定めるための多くの手がかりをえることができた。参加者のみなさんも同様であれば嬉しく思う。

※コメント後、他の参加者を交えた全体討議を行った（進行：中村玲太）。

親鸞と中世被差別民に関する研究会報告②

# 【後編】部落史研究からみた親鸞聖人の思想と時代

元大阪市立大学教授　上杉　聰　氏

2020年２月６日～７日、部落史研究家である上杉聰先生をお招きして、親鸞と中世被差別民に関する研究会を開催した。親鸞晩年の著作、『唯信鈔文意』における「屠沽の下類」、「りょうし・あき人」という言葉に焦点を当てて、親鸞と当時の被差別民とのリアルな関係性について提言をいただいた。前号から引き続くかたちで本号に、研究会の一端を報告する。

（親鸞仏教センター嘱託研究員　菊池　弘宣）

## ■中世の被差別民と親鸞とは、実際に関わりがあったのか

「中世の被差別民と親鸞とは、実際に関わりがあったのかどうか」ということですが、部落差別が形成されていく時代を江戸時代と考えると、両者は無関係となります。しかし、戦前からの部落史研究の学問的な成果として、すでに平安時代の中期(1000年前後)に部落は生まれ始めていた、というのが結論です（『部落解放論の最前線――多角的な視点からの展開』解放出版社、上杉聰「部落史研究の「学問」としての進歩と退行について」47頁以下）。親鸞聖人（1173 - 1262）の信仰の生育過程というのは、その直後の時期にあたっており、時期的にほぼ重なっています。当時の京都には、被差別民はあちこちに存在し、見えていたと思います。問題は、その存在が信仰の目で見えていたか否かです。親鸞聖人は、その存在を心で見ていた人であると私は思います。部落を示す「エタ」という言葉が生まれる前に、「屠者（屠児）」「餌取り」「河原人（者）」など様々な名前で呼ばれた（同一の）人々が存在していました。親鸞聖人は仏典にも出てくる「屠者」の言葉を通して、当時河原に住んで、生きものを殺すことを生業にしていた人々を捉えていたと思います。

## ■中世の被差別民である「屠者」と、親鸞が言う「屠沽の下類」、「りょうし・あき人」は、本当につながるのか

ですから、『唯信鈔文意』に出てくる「屠沽の下類」の「屠」は、生き物を殺して「殺生」を行い、「不殺生戒」を破っている人とも理解されていたと思います。「沽」は、「売り買いする」という意味ですが、仏典の中には、「不沽酒」という使い方もあり、大乗仏教の戒律である「不飲酒戒」と関係があるかもしれません。「屠」も「沽」も両方とも、「十悪」という仏教的な文脈で捉えるべきと思われます。つまり、宗教的で「普遍的な行為」を問題にしていたと思います。

また「『唯信鈔文意』の「りょうし・あき人」というのは、親鸞が流罪以後に越後や関東の地で出会った、「いなかのひとびと」の具体的な生活のすがたを押さえている言葉なのではないか」ということですが、たとえば『歎異抄』第十三章を読んでみると、親鸞聖人は、「屠」について、非常に具体的に語ろうとしていると思うわけです。「海や川で魚をとっている漁師がいるでしょう。野山で鹿を狩り、鳥を捕まえている猟師がいるでしょう。それが「屠」ということですよ」という語り方をしています。親鸞聖人はいつも、普遍的なことと具体的なことを分けないで語っていると私は思います。

## ■親鸞の取捨選択――仏陀の真意を明らかにする

親鸞聖人ご自身の中には、ずっと考え続けてきた仏教の文脈というものがあったと思います。しかし、もう一方で、具体的に目の前で苦しんでいる人たちを見ていたと思われます。そういう人たちのことを念じながら、私流に言うと、これは、「屠」に関する問題であると見極め、この人たちを御仏は必ずお救いになる、と考えていたと思います。そもそも、「屠沽の下類」の典拠である元照（1048 - 1116）撰述の『阿弥陀経義疏』という典籍は、「屠沽の下類が、念仏によって超越して成仏できる」（東本願寺出版『真宗聖典』238頁趣意）ということ、つまり、救われることを説いているものなのです。親鸞聖人は仏陀釈尊の真意を考え抜き、真意にかなう典籍の文脈を選び取ったのだと思います。

■『歎異抄』と『唯信鈔文意』に通底する親鸞の願い

『歎異抄』第十三章には、「わがこころのよくてころさぬにはあらず。また害せじとおもうとも百人、千人をころすこともあるべし」（『真宗聖典』633頁）という言葉があります。これは、「自分の思い通りに生きられない、悪業をなしてしまう身の事実」について、親鸞聖人が直接、関東のお弟子に対して語った言葉です。そしてそれは、海川に網を引いて釣りをしている「漁師」、野山に鹿を狩っている「猟師」、「商いをしている者」、そして「田畠を作るお百姓」たちを見ながら、広く語りかけた言葉でもあると思います。

『唯信鈔文意』の文脈には、お百姓などは出てきません。つまり、『歎異抄』と『唯信鈔文意』とは明らかに文脈が異なっているわけです。ただ逆に、「りょうし・あき人、さまざまなもの」（『真宗聖典』553頁）という、そういう様々な人々に通じているのは、『歎異抄』で親鸞聖人が語る、「ただおなじことなり」、「さるべき業縁のもよおせば、いかなるふるまいもすべし」（『真宗聖典』634頁）という言葉だと思います。「業縁次第で、何をしでかすかわからない。どんな悪いことでもするという点では、みんな同じである。だからこそ、御仏の慈悲の前に、我々はみんな救われる位置にある。そう信じるのだ」と、そのことを親鸞聖人は、一番伝えたかったのだと思います。恐らく、そこが共通するところであると思います。そこに、どの程度社会性をもたせるのかというのは、これは正確を期そうと思えば、すごく難しいかもしれませんが、そこは、我々は、様々なニュアンスで表現していく外ないということでしょう。

■親鸞の部落差別と向き合う姿勢

親鸞聖人の没後少しして描かれた『天狗草紙』（1296年頃）という絵巻物には、京都の四条河原あたりで、「穢多」（屠者）の子どもが鳥を捕まえ、首をねじって殺している姿が描かれています。絵中の詞書（ことばがき）には「おそろしきものはよな」と、恐ろしいものが次々と列挙される中で、最後に「穢多がきもきり」、つまり「穢多による内臓の料理」があげられています。それを周りの皆が、「エタの手で鳥はこんな姿に変わる。怖いぞ、怖いぞ」などと言って、はやし立てながら見ている。差別が扇動されている、そういう時代です。そうした時代にあって親鸞聖人は、「さるべき業縁のもよおせば、いかなるふるまいもすべし」、「あなたも私も同じだよ」と、「それを悪く言うべきではないよ」と、「みんなこのようにして、他の生き物の命を奪い、自分の命をつないで生きているでしょう」と、言ってくださっていると思います。

部落差別が発生しつつあったその当時、こうした差別的な見方に対し、「それはおかしい」と考え、鋭角的に立ち向かっていった人として、私は親鸞聖人を尊敬せざるを得ません。日本の歴史の中に、このような方がおられたということは、私にとっては本当に救いです。私は真宗の門徒ではありませんが、親鸞聖人の弟子であると思い、この部落史研究を進めています。

■いのちを継いで生きるもの

『歎異抄』には、「野やまに、ししをかり、とりをとりて、いのちをつぐともがら」（『真宗聖典』634頁）という言葉があります。これは、「屠殺をしている人」にだけ向けている言葉ではないと思います。私たち自身が、他の生き物の命を奪って、自分の命を継いでいるという認識が根本だろうと思うのです。そういう意味で、「他の生き物を殺している人々」も我々も、同じではないかということでしょう。「いのちをつぐともがら」の「継ぐ」という言葉は、まさに、我々にとってのキーワードであると思います。

（今回の研究会報告へ向けてご諮問いただいた点については、以上で概略ご紹介できたと思いますが、同じくお問い合わせされた『現代語　唯信鈔文意』のうち問題とされた箇所への私の見解は、別途、付属文書にして具体的にお示ししたことを申し添えします。）

## 研究会を終えて

親鸞の言う「屠沽の下類」の文脈をどう読むのかについては、様々な了解がある。また中世史学において、親鸞と中世の被差別民の関わり合いを捉えていく際の大きな論点の一つである。当センターとしては、それらの了解をふまえたうえで、新たなアプローチが必要であると考えている。今後、親鸞が限定して押さえた「りょうし・あき人」の固有性に注目し、現代に通じる普遍的な問題という視点で、この中世の具体的な問題を捉え直していくことが課題であると思われる。

というなり。信心のたまをもって愚痴のやみをはらいあきらかにてらすとなり。「疑雲永晴」というは、疑雲は願力をうたがうこころをくもにたとえたるなり。永晴というは、うたがうこころのくもをながくはらしぬれば、安楽浄土へかならずうまるるなり。無碍光仏の摂取不捨の心光をもって信心をえたる人をつねにてらし、まもりたもうゆえに、「仏光円頂」といえり。仏光円頂というは、仏心をしてあきらかに信心の人のいただきをつねにてらしたまうとほめたまいたるなり。これは摂取したまうゆえなりとしるべし。

《訳　註》

**仏光円頂**：隆寛による銘文の「仏光円頂」とは、ひとえに法然の功徳を讃嘆した言葉であると思われる。ただ、読み手がその根拠を、「法然という特別に優れた人」に見てしまうならば、「仏光円頂」の「光」を、「法然の有するカリスマ的な智慧・能力」として崇めることになりかねない。親鸞は、「仏光円頂」について、「阿弥陀仏が摂取不捨の大慈悲の心よりあらわす光によって、信心を得た人の頭（頂）を常に照らし護る」と解釈している。その根拠は、どこまでも「阿弥陀仏という法のはたらき」にあると言って讃嘆するのである。

心という宝珠を心に獲得した人は、生死という迷いの暗闇の中で惑うことがない。だから「心照迷境」というのである。信心という宝珠の光によって、愚痴の暗闇を除き、完全に明るく、照らすというのである。「疑雲永晴」の「疑雲」とは、阿弥陀如来の本願のはたらきを疑惑する、その心を雲にたとえたのである。「永晴」というのは、煩悩具足の凡夫には、疑う心が雲のように常に覆っている。それを信心という宝珠が透き通る光によって、常に照らし出し晴らしている。それゆえ阿弥陀如来の安楽浄土に必ず生まれるというのである。無碍光仏（阿弥陀仏）は、すべてのものを摂め取って、決して見捨てない。その大いなる慈悲の心よりあらわれる光明で、信心を獲得した人を常に照らし、護っていてくださる。そういうわけで「仏光円頂」といっている。「仏光円頂」というのは、無碍光仏が大いなる慈悲の心で、完全に明るく、信心の人の頭（頂）を常に照らしてくださっている。そのように隆寛律師が、ほめたたえておられるのである。これは、無碍光仏が光明のはたらきで、信心の人を摂め取ってくださっているからである、と知らなくてはならない。

※銘文（漢文）に付した訓読文の出典は、『本尊色紙文』である。『真宗聖教全書』第五巻所収のものによった。

## 現代語化をめぐって

**【原文】（「略本」親鸞八十三歳時の読み方）**

**「慕道化物」というは、慕道は無上道をねがいしたうというなり。**

**【原文】（「広本」親鸞八十六歳時の読み方）**

**「慕道化物」というは、慕道は無上道をねがいしたうべしとなり。**

※親鸞著作の『尊号真像銘文』には、巻末に「愚禿親鸞八十三歳　書写之」とある「略本」と、「愚禿親鸞八十六歳書之」と記されている「広本」との二種類がある。

「慕道化物」の読み方について、この銘文の作り手である隆寛は、源空（法然）を主語にして、「源空聖人の成仏道を志す歩み・教化する姿」を、一貫して讃えていると思われる。その銘文を解説する親鸞も基本的には、源空のことを念じているのだが、親鸞の場合、『尊号真像銘文』の「略本」から「広本」にかけて、自身の原文の読み方を転換している。「広本」では、「慕道は無上道をねがいしたうべしとなり」と書き改め、親鸞はその意を、「無上道を願い、慕いなさい」という「源空聖人からの呼びかけ」として受けとめたと見ることができる。

そのように読むことによって、次の原文、「信珠在心」からの主語は、源空聖人の呼びかけ・教化を受けた者の主体の側へとダイナミックに展開していくと受け取ることができる。すなわち、主語となる「信心をえたる人」を、親鸞は源空だけに限定せず、親鸞自身にも引き当てて、さらには銘文の読み手をも巻き込みながら、われわれも当事者であるという意識を喚起していく。

この「慕道化物」の読み方が、この銘文における親鸞の本意を読み解く上でのターニングポイントであるといえる。

# 聖典の試訳（現代語化）『尊号真像銘文』末巻 ③

## 「源空聖人の真影の銘文（隆寛による銘文）」後半

### 問題提起

「末巻」の二番目、源空（法然）聖人の真影に記された銘文を取りあげている。それは元来、吉水の法然門下で、親鸞の兄弟子・隆寛（原文では「劉官」と表記）が、法然の徳を讃嘆した文である。その讃銘文を、親鸞が解釈するという構造になっているのだが、隆寛による銘文（漢文）の意と親鸞の解釈には決定的なちがいもあるように思われる。その「ちがい」が焦点となる。

親鸞はここで、「信心の人のいただき」に注目している。「いただき（頂）」とは、「頭」、存在の要である。親鸞の言う、「仏心」によって「信心の人のいただきをつねにてらしたもう」とは、「頭が下がる」という我々における信心と、「必ず救う」という阿弥陀仏の大いなる慈悲心とが、完全に相応することを表しているのではないだろうか。

「頭が下がる」ということは、どこまでいっても頭が下がらない、傲慢不遜な自分の姿を言い当てられることに始まるのではないか。気がつけば、自分のちっぽけな理知分別を、絶対であるかのように思い込み、現実を歪めて解釈している。「目の前の事実に謙虚になりなさい」という親鸞からの呼びかけとして、この銘文のこころをいただいていきたい。

（親鸞仏教センター嘱託研究員　菊池　弘宣）

### 【原文】

日本源空聖人の真影

四明山権律師劉官讃「普勧道俗　念弥陀仏　能念皆見　化仏菩薩　明知称名　往生要術　宜哉源空　慕道化物　信珠在心　心照迷境　疑雲永晴　仏光円頂　建暦壬申三月一日」（普く道俗を勧めて弥陀仏を念ぜしむ。能く念ずれば皆化仏菩薩を見たてまつる。明らかに知りぬ、名を称するは往生の要術なり。宜きかな、源空、道を慕ひて、物を化しむ。信珠心に在り、心迷境を照らす。疑雲永く晴れて、仏光頂に円かなり。建暦壬申三月朔日）

（中略）※中略部分は『親鸞仏教センター通信』第七三号に掲載

「宜哉源空」ともうすは、宜哉は、よしというなり。源空は聖人の御名なり。「慕道化物」というは、慕道は無上道をねがいしたうべしとなり。化物というは、物というは衆生なり。化はよろづのものを利益すとなり。「信珠在心」というは、金剛の信心をめでたきたまにたとえたまう。信心のたまをこころにえたる人は、生死のやみにまどわざるゆえに、「心照迷境」

### 【現代語】

日本源空聖人の真影

四明山（比叡山）に所属する、権律師の隆寛（「劉官」）が、源空（法然）聖人を讃嘆している文である。「普勧道俗　念弥陀仏　能念皆見　化仏菩薩　明知称名　往生要術　宜哉源空　慕道化物　信珠在心　心照迷境　疑雲永晴　仏光円頂　建暦壬申三月一日」

（中略）※【原文】参照

「宜哉源空」の「宜哉」とは、「本当にその通りです」と隆寛律師が、源空聖人をほめたたえているのである。「源空」とは、法然聖人の尊い志をあらわす仏弟子としての名なのである。「慕道化物」の「慕道」とは、この上ない仏に成るさとりを願い、慕いなさいという源空聖人の歩みを通した呼びかけである。「化物」の「物」とは、生きとし生けるものである。「化」は、この上ない仏に成るさとりを願い、慕う歩みが、あらゆるものを教化し、利益を与えるというのである。「信珠在心」というのは、隆寛律師が、金剛の信心をみごとな宝石の珠にたとえてくださっている。信

## 親鸞仏教センターの動き

（2020年11月～2021年1月―抄出―）

11月２日、オンラインリモート会議システムにて、四方田犬彦氏をお招きした「正信念仏偈」研究会を開催。12月22日、同様にオンラインにて、第65回「現代と親鸞の研究会」（講師：坂上暢幸氏、大城聡氏）を開催し、裁判員制度についてお話を伺った。また、12月から２月にかけて、2020年度「親鸞仏教センター研究員と学ぶ公開講座」（全９回）をオンライン上で開催した。

**【出版情報】**

『花野充道博士古稀記念論文集　仏教思想の展開』（山喜房佛書林）に、藤村潔「仏性論争における『大乗起信論』の位置」、中村玲太「天台本覚思想と證空――「現生往生」思想の究明を射程に入れて」が掲載。ジョエル・ベスト『社会問題とは何か――なぜ、どのように生じ、なくなるのか？』（筑摩選書、赤川学監修･翻訳）、ケン･プラマー『21世紀を生きるための社会学の教科書』（ちくま学芸文庫、同上）、両著の翻訳を宮部峻研究員が一部担当。

リレーコラム

## 「近現代の真宗をめぐる人々」第12回

（高木宏夫（たかぎひろお）[1921-2005]）

真宗にとって近現代とは、教団のあり方をめぐって宗門内外から厳しく批判が寄せられ続けている歴史であると言えるかもしれない。批判を寄せた人の中には、宗門のあり方に対してきつく突き放す人もいた一方で、なおも真宗の可能性に期待する人もいた。宗教社会学者の高木宏夫は、宗門外から真宗のあり方を厳しく批判しつつも、現代における真宗の可能性に期待した一人である。

新興宗教研究の第一人者であった高木は、訓覇信雄の依頼を受けて、同朋会運動の只中にあった大谷派の布教・教化活動の実態調査を行っている。その調査の一部は、『人間性回復への道』（法蔵館 、1977）、『行証に生きる人』（法蔵館、1978）の二冊にまとめられている。調査を通じて彼が観察したのは、教義知識を振りかざすばかりで、生活者が日々の中で抱える苦悩を受け止めていない僧侶の姿であった。しかし、同時に、高木は「それでも『真宗は生きている』」と述べ、生活の中からうち出される真宗の姿を認めた。

教義知識を体系的に身につけるだけではなく、日常に生きる生活者の体験を介してこそ、信仰が生まれるのではないか。こうした高木の問題提起は、今日の宗門のあり方を考えていく上でも受け止めていく必要があるだろう。

（宮部　峻）

## あとがき

大人になると物事を注意して見るようになってくる。

例えば、幼いときは食べ物を見ても好きか嫌いかしか考えず、ただ出された物を何も考えず食べるだけだったが、今はスーパーから食べ物を選び、いろいろな数字を見て少しでもお得に購入しようとする。商品の賞味期限や、原材料、値段などがそうだ。最近では生産者の写真まで載っている物もある。

見えることで安心し見えないと不安になるのが我々ではないだろうか。だが、必要なことや自分に関係のあることしか見ようとせず、見えないふりをするのもまた大人である。

私が今でも覚えているのは高校生のときのことだ。

教室の花瓶に花がいけられていたのをなんとなく眺めていた。何日かすると一輪だけ花が枯れ出した。毎日水は誰かが替えているのだから一輪だけ枯れるのはおかしいと思ったが、そのときは見て見ぬ振りをした。

数日たって花瓶を覗き込むとやはり一輪だけ花瓶の奥まで茎がとどいておらず、水を吸えていなかった。おそらく一輪だけかわいそうな花があるのではと心のどこかでは気づいていたのに、完全に枯れてしまうまで見ようとはせず、気づかないふりをしていた。

花を見ても「綺麗だ」とその美しさくらいにしか目が向かないのは悲しい。これからは、見て何かに気づき思えるような人でありたいと思う。

そのあと新しい花に変えられるまで、一輪だけ枯れた花からずっと見られているような気がしていたからだ。

（不動　眞智）